



# 特定の地域・母集団（宮城県）における全リンパ腫・リンパ球性白血病罹患症例の把握に基づく疫学的調査研究

著者	勝  寛  浩  紀
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第16807号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00096809">http://hdl.handle.net/10097/00096809</a>

## 学 位 論 文 要 約

博士論文題目 ..... 特定の地域・母集団（宮城県）における全リンパ腫・リンパ球性白血病罹患症例の  
把握に基づく疫学的調査研究 .....

..... 東北大学大学院医学系研究科 医科学専攻

..... 病理病態学講座 ..... 病理診断学分野

学籍番号..... B2MD5026 ..... 氏名 ..... 勝 畠 浩 紀 .....

リンパ腫およびリンパ球性白血病の疫学的研究に関しては複数の報告がなされているが、大半は大都市圏の単独または複数の医療機関を対象に行われたものであり、特定の地域内での人口集団を背景にした研究とはいえない。また、血液内科または病理部門の一方が主導する研究が大半であり、取り扱う症例に偏りが生じている。診断自体でも時に困難を極め、亜型分類が確定しない症例（亜型分類不能症例）が多くなっている。そのため特定の一定地域内における正確な発症数、つまり罹患数を示した研究は存在せず、報告された亜型頻度にも偏りが認められる。

本研究では罹患数とそれを基にした罹患率を算出し、亜型分類不能症例を減じた亜型頻度の追求を目的とした。そのため、病理部門と診療科（血液内科、小児科、内科、皮膚科等）の協力を得て、2006年から2010年に宮城県内で新規にリンパ腫またはリンパ球性白血病と診断された症例を抽出した。病理解剖にて初めてリンパ腫と診断された症例も加えた。その結果、対象となる症例が2098例、うち生検等により診断された症例が1853例、骨髄塗抹標本等により診断された症例が232例、病理解剖により診断された症例が13例であった。人口100千人あたりの罹患率は5年平均で17.8となった。亜型頻度は、びまん性大細胞型B細胞性リンパ腫、非特異型（diffuse large B-cell lymphoma, NOS : DLBCL）が37.6%、濾胞性リンパ腫（follicular lymphoma : FL）が15.7%、節外性濾胞辺縁体粘膜関連リンパ組織リンパ腫（extranodal marginal zone lymphoma of mucosa-associated lymphoid tissue (MALT lymphoma) : MALT）が9.1%、Bリンパ芽球性白血病/リンパ腫（B lymphoblastic leukemia/lymphoma）が5.5%、成人T細胞性白血病/リンパ腫（adult T-cell leukemia/lymphoma : ATLL）が4.2%、慢性リンパ球性白血病/小リンパ球性リンパ腫（chronic lymphocytic leukemia/small lymphocytic lymphoma）が3.2%であった。また、亜型分類不能症例を全体の1.0%にまで減じた。

地域がん登録を基にした推定罹患率、亜型頻度も報告されている。推定罹患率は16.7と本研究との間に乖離が認められ、女性でその差が顕著であった。亜型頻度では分類不能症例が全体の22.1%に達し、DLBCLが45.3%、FLが13.5%、MALTが7.2%と上位3亜型で本研究との間に差が認められた。DLBCLとFLの鑑別が厳密になされていないこと、MALTに抽出漏れがあることが理由として推測される。地域がん登録には症

例の捕捉および分類において不十分な点が存在していると考えられた。

さらに、本研究の正確な亜型頻度を基にして、男/女比について検討した結果、MALTが0.6、ATLLが0.7、血管免疫芽球性T細胞性リンパ腫（*angioimmunoblastic T-cell lymphoma*）が2.9であった。これらは、複数の報告に基づく従来の認識と比較して乖離が認められ、新しい知見となり得る。

本研究では、特定期間かつ特定の一定地域内における正確な発症数、つまり罹患数を得ることができ、さらにその罹患数を基にして罹患率、亜型頻度を報告することができた。このような正確な罹患数、亜型頻度を提示した報告例は日本では類がなく日本初の研究であり、これらの数値は今後、日本の代表的な指数になり得る。さらに、本研究で得られた基礎データを活用することによって、予後解析を含めた臨床研究につながることを期待される。